

界面粒界の最新研究発表

志摩で200人国際会議

材料やナノテクノロジー分野の基礎的な研究成果について、世界のトップレベルの研究者約2000人が集まった第13回界面粒界国際会議（東大、文部科学省特定領域研究など共催）が志摩市のホテルで2日間で開かれた。

様々な材料物質は、元になる複数の結晶の間にある「界面」の構造で、その電気特性など性質が大きく変わる。近年のナノテクノロジーなどの発展で、その現象についての理解が進み、界面構造のコントロールも可能になる中、同会議は、ものづくり産業への応用や影響も大きい、そうした分野の最先端研究の発表や意見交換が行われた。

会議は、1975年に第1回がフランスで行われ、この分野では最も権威のある国際会議。日本では

1985、96年に続く3度目の開催。先月27日に開幕し、57件の講演や約120件のポスター発表による研究発表があった。

読売新聞2010年（平成22年）7月4日日曜日
三重版30頁